スイスの夏の音楽祭

スイスの夏は過ごしやすく、山間の保養地は昔から富裕な常連客が毎年集まってくるため、夏の音楽祭も自然発生的に育っている。そのなかでいま、勢いがあるのはグシュタート・メニューイン・フェスティヴァルだ。その名を冠したヴァイオリニスト、ユーディ・メニューイン一家は、1954年からグシュタートで夏を過ごし、現地で請われて始まったコンサート・シリーズから、1957年に3日間のフェスティヴァルが誕生した。それが現在は5週間の大音楽祭となり、セミ・ステージのビゼー《カルメン》やトップ・オーケストラ、アーティストの名が並ぶ。若手発掘にも熱心で、日本人ピアニスト有島京の「新星マチネ」（8月3日）も「60分間とは思えない多彩な、詩のようなコンサートだった」と地元紙で評価された。

今年のテーマは「パリ」。そのハイライトの一つであるパリ在住のカティア・ブニアティシヴィリのピアノ・リサイタルを、8月16日に聴いた。前半は現在の彼女のテーマであるシューベルト。「即興曲」op.90は曲間を切らずに4曲続けられ、凄いスピードで弾きあげた。「第1番」、「第3番」などのゆったりとした部分は、彼女特有の長いフレージングでたっぷりと歌心を聴かせると共に、「即興曲」の名の通り、いま生まれたような新鮮さで音を紡いでいった。圧巻は、リスト編曲のシューベルト歌曲3曲のなかの、とくに《糸を紡ぐグレートヒェン》で、昨年聴いたときより、さらに感情が炸裂していた。後半のリスト《マゼッパ》と《ハンガリー狂詩曲第6番》、ストラヴィンスキー「《ペトルーシュカ》からの3楽章」は目まぐるしい超絶技巧で弾き抜き、アンコールを2曲経た後のサイン会でもまだ、「グルグル目が回っている」と自嘲していたほどだった。当音楽祭常連の彼女を聴きに集まってきているファンたちの、充足感あふれる表情が印象的だった。

スイスからの要注目歌手

音楽祭以外はどの音楽団体も、一斉に夏季休暇中のこの時期、スイス人の要注目アーティスト紹介に誌面を割きたい。九州ほどの国土面積の割には、多くの指揮者や楽器奏者を輩出しているスイスだが、その内向的気質や、歌に適しているとは言えないスイス・ドイツ語の発声ポジションのせいか、「世界的歌手が出ない」と嘆かれている。そんななか、いまいちばん上昇気流に乗っているのがソプラノ歌手のレグラ・ミューレマンだ。ティーン・エイジャーのころ、伯母に連れられて行ったチューリヒ歌劇場で観たモーツァルト《フィガロの結婚》がきっかけで、オペラ歌手を目指したという彼女が、スザンナとして戻ってきた先シーズン、公演前の楽屋で話を聞いた。

「私の人生を変えた歌劇場の舞台に、同じ演目で立つのは特別な感慨があります。当時は、（《フィガロの結婚》の配役では）自分の年齢に近いバルバリーナのほうが好きだったのですが（笑）」

今回のスヴェン＝エリック・ベヒトルフによる演出は動きが非常に多いが、「音楽的花火のようなこのオペラには、この演出が合っていると思います。覚えるのは大変だったけど（笑）。指揮のオッターヴィオ・ダントーネのテンポは速いけど、4週間もたっぷり稽古できたし、みんなでいつも笑っている仲の良さでした」

当歌劇場デビューは2012年ドニゼッティ《愛の妙薬》のジャンネッタだったが、ローランド・ビリャソンや現在のマネジメントとも出会えたので、やはり彼女にとって福を呼ぶ劇場のようだ。ジュネーヴ、バーデン＝バーデンを経て、来年のザルツブルク・モーツァルト週間では、ビリャソン演出《フィガロの結婚》でもスザンナを歌う。

めずらしいスイス出身の世界的歌手、ミューレマン。《フィガロの結婚》でスザンナを歌った ©T+T Fotografie Toni Suter

「ローランドは若い世代を支える心を持っているので、有名なテレビ番組『明日のスター』にも招かれるなど、サポートしてくれました」

素顔の彼女は好感の持てる普通の女性だが、スルセー劇場でオペレッタを歌っていた祖母の血を引いているらしい。

「家では常に、ビートルズの曲まで何でも歌っていて、9歳まではピアノも習っていました。ルツェルンのカントライ（児童声を含む合唱隊と器楽奏者からなる聖歌隊）の練習を聴いたら入団したくなり、宗教曲に目覚めました。ギムナジウムでも音楽を専攻していて、卒業後の進路に困ったとき、『得意なものを』と言われてルツェルン音楽院に進みました。こうして生まれ持った声を壊されないまま、19歳でバルバラ・ロッハー先生について学びました。パズルのピースがどんどん合っていくようでした。いまでも、録音や初役の際は先生に習いに行きます」

シューベルト&スイスの作曲家の新譜を近々録音する予定だ。11月にモーツァルト《ハ短調ミサ》で初訪日する予定だった。日本をよく知りたいため、十分なスケジュールを空けて楽しみにしていたところ、オファーが「ソプラノ」ではなく「ソプラノ2」だということに気づき、彼女の声には低めなため、泣く泣く来日はお預けすることに決めたという。2月にはウィーン国立歌劇場にも《愛の妙薬》のアディーナでデビューする。1年後にはモーツァルト《魔笛》のパミーナも二つのプロダクションで歌う予定だ。4歳年下のダウン症の妹を通して、障がい者支援財団SSBL親善大使も務める彼女は、スイス声楽界の期待を背負っている。